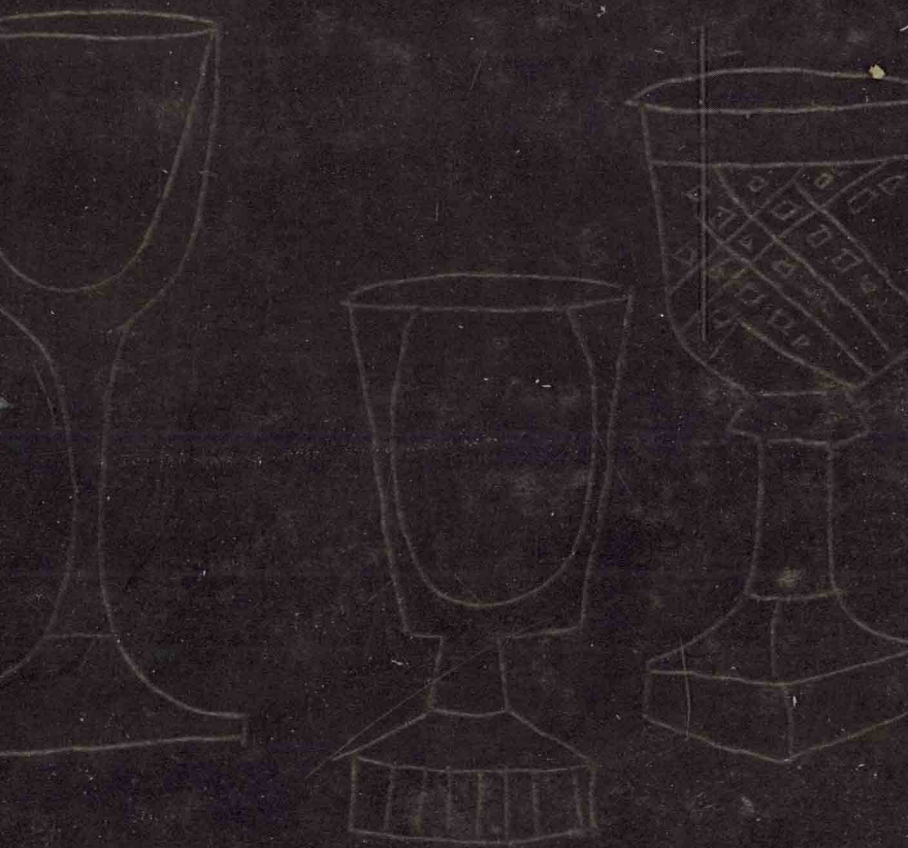
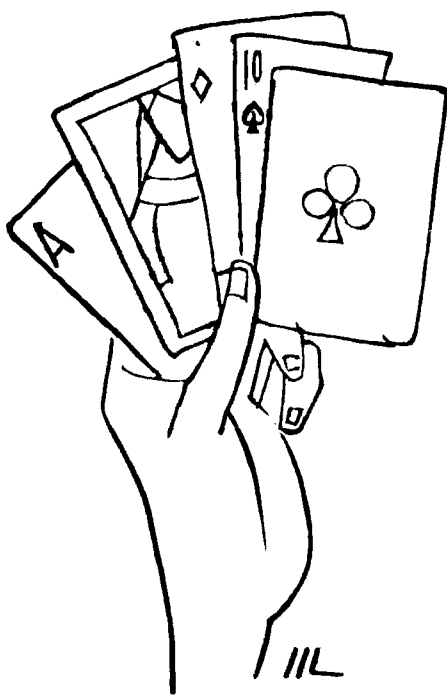


奇妙な夜



妙な夜

田村泰次郎



講談社版

き みよう よる
奇 妙 な 夜

© 田村泰次郎 一九六一

昭和三十六年十一月十日 第一刷発行

二九〇円

著 者 田村泰次郎

東京都文京区音羽町三ノ一九

発行者 野間省一

印刷所 株式会社 常磐印刷所

(大進堂製本)

東京都文京区音羽町三ノ一九

発行所 株式会社 講談社

振替 東京三九三〇
電話大塚(九四一)大代表三一一

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

目次

虫		五
ひも		二七
消えた歌		四三
自分の肌		六三
埴輪の女		八五
女が笑う		一〇九
ピカソの女		一三三
雨の降る街で		一五五
息子の愛人		一七七
色女房		一九九
奇妙な夜		二一九

奇
妙
な
夜

虫

暗い通りをへだてて、むこうの歩道にいくつものひと影が立っている。そのひと影に、歩いてきた別のひと影がすうっと近寄って、しばらく立話をしているかと思うと、また離れて行く。なかには二つのひと影が一しょに歩きたして、路地の闇へ消えて行く。話がうまく成立したのである。

通りは、明るいライトを照らした車が、ひっきりなしに行き交うている。そのたびに、一瞬、あたりはぱあっとかがやいて、またすぐ暗くなる。

藤本健一は、通りのこっち側の歩道に立って、むこう側の歩道の新城千恵子の影を、もう三十分以上もみつめている。いくつか並んで立っているひと影のなかで、電柱の右側に立っているのが、千恵子の影である。無論、顔かたちはわからない、影絵のようなうすぼんやりとしたシルエットで、彼女と判断するだけである。

今夜は、もやが降りている。秋が深くなつて、毎夜、もやが多くなった。

「おい、今夜はやけにシケてやがるな。まだ、美代子の奴、一人も客がつかねえんだ」
いつのまに近づいてきたのか、濁った男の声が、健一の耳もとで囁いた。いつも隣りに立っ

ている村田という男である。

「月なかは、どうもいけねえよ。客のふところが、一番寂しくなるときだからな。お前んところは、景気はどうだい？」

「景気というほどのことは、ないですよ」

健一は、ぼそりと答えて、軽い咳をした。

「でも、お前んところのスケは、いい女だからな。それに、素人っぽいのが、客にはたまらねえんだ」

「うちだって、さっきからずうっと客がついてませんよ」

相手のほめ言葉には、なにか裏がありそうに思えて、彼は警戒するように打ち消した。

「どうだね。おれに、一枚でいいから貸してくれねえか。今夜、客がつけば、すぐ返すよ。屋台で、一ぺえやりてえんだ。こうひえこんでくると、一ぺえやらねえことには、落ちつかねえのさ」

そぞろ空氣がつめたくなってくると、くらがりに立っていることも、なんとなく氣持がむなしくなってくるのだらう。自分の女の身体を、よその男にわずかの金で提供して、細々と生きて行く生活に、なんとなく、拗りどころのない味氣なさを感じずにはいられない。すがりつくように、酒が欲しいのである。

「ぼくんとおれだって、シケてるんですよ。今夜は、まだ客がつかないんです」

相手がヤクザがかった言葉づかいをすればするほど、健一は初心な物腰になった。そのほう

がかえって、相手につけこまれるすきをあたえないようであつた。

「なんとか融通つかねえかよう？」

「どうも」

「ちえっ。けちけちしてやがらあ」

大げさに舌打ちをして、村田ははなれて行つた。ふだんは、氣の弱そうな男なのに、この頃この男はへんにヤクザがかった言葉づかいをする。

そのとき、むこう側の歩道に立っている千恵子のそばへ、一人の男の影がすうっと近寄って行くのが見えた。しばらく、彼女と立ち話をしていたが、取引が成立したらしく、二人肩を並べて歩きだし、やがて路地の闇に吸いこまれた。

健一は、ぐっと唾をのみこんだ。

まだ、彼はこんな立場に馴れないのである。いつまでたっても、馴れないにちがいない。新城千恵子をこんなしやうばいに墮ちこませてから、もう三月にもなる。が、道路のこつち側にいる彼のまわりの男たちのように、無感動とも見える氣持ではいられない。十八歳の新城千恵子のまだ稚さの残っている未熟な浅黒い身体が、いま頃、見知らぬ男のために、どのようにあつかわれているか、健一には眼に見えるようだ。

千恵子の影がふたたび、むこう側の歩道にあらわれるまでの時間を、健一は胸を灼かれるような氣持で立ちつくすのである。

藤本健一は、東京から汽車で四時間かかる地方の高等学校の教師で、新城千恵子は彼の教え

子だった。健一には、妻子があった。齢も千恵子とは、二十以上もちがったが、二人は愛しあって、郷里をとびだしてしまった。健一には、いまでも、あのときの自分の気持がよくわからない。まったく、分別のひと並み以上にあるはずの職業についている自分が、何故子供みたいな教え子と、そんなことを仕出かしたのか、あとから考えて納得が行かない。新城千恵子のがむしゃらな、むこうみずの若い情熱に負けたというより仕方がない。彼女の二人の姉が郷里の町で、芸者をしており、家がそういう環境だったので、彼女も友だちより早熟だったのにちがいない。顔つきや、身体つきには稚いところが多分に残っているが、気持は結構大人である。

齢に似あわず、勝気で、よく気がつき、齢のひらきなど感じさせないくらいに、まめまめしく大人びて、健一の身のまわりの世話をよく焼いた。ところが悪いことに健一は、以前、自転車もろとも田んぼのなかへ落ちて、杭で胸を強打したことがあり、そのときの内部の傷があとをひいているらしく、上京するとまもなく、胸を患いはじめた。医者は絶対安静というのだが、そうもしてられないというものの、やはり、身体を動かしてはたらくことなどは無理だった。いまは昔とちがいが、胸の病気で死ぬことなどめったにないと、ひとのいうのを信じて、軽くみたのがいけなかった。薬もろくに飲めない身分は、どこまでも不運がつきまとい、いつまでもはかばかしくない。新城千恵子は、パスとか、マイシンとか、高価な薬を手に入れるために、はじめは無論、健一にはだまって、夜の街に立つようになった。

それを知った健一は、気も狂いそうに怒ったが、あなたのためにそうしたのだと彼女からいわれてみれば、ふりあげた手の持つて行き場がなかった。もともとそのときどきの衝動に生き

ることには烈しさがあつても、貞操觀念などのそれほど強い女でないことは、健一にもわかつてゐることで、あきらめるより仕方がなかった。

田舎を出るとき、家から持ちだしてきたわずかの貯金も、すでに手もとにはなかった。はたらくには、体力が及ばない。おそかれ、早かれ、いやでも、そんな境遇に堕ちるよりほかに手がないようであつた。いくらか気分の良い日は、街に出て、仕事をしている彼女の見張りに立つた。刑事があらわれたり、客が乱暴したり、仲間同士のいざこざがあつたりするごとに、男は自分の女に連絡したり、女のかわりになつて、いざこざを解決したりする。どんな女にも、そういう男がいた。健一も、その男たちの一人になつた。そうはいつても、いざとなつたら、非力で、病人の彼ではものの用にたたないこともわかつてはいたが、それでもいいよりはいたほうがましだつた。すくなくとも、彼としても、自分で千恵子の苦勞のいく分の一かは、受け持っているのだという氣がして、氣安めになつた。

客が帰って行くと、明るいヘッド・ライトをまきちらしながら、車の行き交う大通りを横ぎつて、千恵子が近寄つてきた。

ひろい小麦色のおでこの下に、一ぱいにみひらかれた眼だけが、濡れたように光っている。彼女は右手にぎっている二枚の千円札を、無造作にさしだして、健一の手にながらせた。千円札には、ほのかに彼女の体温が残っている。

「身体にさわるといけないわ。もう、お帰りになつたら？ 先生」
いまだに、千恵子は健一をそんなふうと呼んだ。この呼び方だけは、習慣になつていて、簡

単には変えられそうにない。

「大丈夫だよ。ぼくのことより、君はどうなんだ。風邪をひいているのだろう。今夜は大分ひえてきたようだ。もう、帰ろうじゃないか」

「あたし、もうすこしはたらくわ。先生、さきに帰っていてよ。身体にさわるわ」

「じゃ、ぼくもいるよ」

「いや。先生は帰っていて」

新城千恵子は頑固にいい張って、そこが二人の宿である新宿トルコ裏の簡易旅館へ、健一をひきとらせるのだった。

「君には、悪いが、また借りられたよ」

おそく宿へ帰る途中で、健一は千恵子にいった。千恵子のはたらいた金だけに、彼女にすまな いと思った。冬がきていた。

「また？」

「あいつの女、今夜も全然客がつかないというんだ。君が魅力がありすぎるからだとき。君のせいにするんだから、こっちも困るんだ」

たしかに村田の女は、客つきが悪い。そばに立っている新城千恵子と比較して、格段に見劣りがするからにちがいない。その責任の大部分は、新城千恵子にあるといってもいいすぎでないかも知れない。

「あいつ、競馬で、このところ大分負けがこんできているらしいよ。女房の稼ぐだけでは、

焼け石に水じゃないのか。あっちこっち、借りられるところは、全部借りつくしたといつていた」

村田が健一に金を無心するのは、なにもいまにはじまったことではない。もう、これまでにかなりの額の金を、健一は彼に借りられている。ところが、その借りっぷりも、いままでとちがつて、しつこくなくなった、金を借りる相手は、誰でもいい。金を貸してくれなければ、ひたくつても金をつくらなければならぬ。そんなぎりぎりのところまで、彼は追いつめられているような様子である。

「金を貸さないと、殺されるかも知れない。あいつの人相は、普通でなくなったよ」

「こっちになんにも弱みがないのに、理由なしに金をとられるって法はないわよ。いいわ、あたしが行って、話をつけてくるわ」

男まさりの負けん気の女だけに、かあつとなると、なにをするかも知れない。追いつめられた鼠のように気のたっている村田を相手に、まっ正面から噛みついて行ったら、どんなことになるか知れない。健一は不安を覚えた。

翌日のひるすぎ、千恵子は宿を出るときから血相を変えて、村田のところへ出かけた。

「あのひとは、可哀そうね。あたしの顔を見ると、はじめは凄んで、それから泣きだしたの。まるで子供みたい。手がつけられないの」

帰ってくると、彼女はそういつた。千恵子の眼を血走らせた顔を見て、おどかしたり、わめいたり、べそかいたりして、追及からひたむきに逃れようとする村田の気ちがいじみた姿が、

眼に見えるようだ。一人の人間としての自覚も、責任感も、まるでないのである。ごっそりと頭のなかに大きな空洞があるのに、身体だけがひと並み以上に育ちすぎたようで、彼を知れば知るほど気味の悪い、けだものめいた肌合いを、こっちの皮膚にじかに感じる。

「ねえ、あのひと、ほんとに可哀そうよ。あたしも、千円札やつちゃった」

話を聞くと、村田は愚連隊の一人から金を借りて、そのとりたてに苦しめられているのだそう。愚連隊の連中も、近頃は警察のとり締まりがきびしいので、小金を十日に一割というようになべらぼうな高利で、しょうばい女や、その情夫たちに貸しつけるようなことを、内職にしている者もあった。村田が競馬であてようとするのも、そういう高利の金の返済を迫られているからでもあった。が、彼の希望はそう簡単にはかなえられるものではない。負けがこむと、借金はいえる一方である。千恵子はそんな村田に、たびたび金を貸してやっているようだった。

寒波のきたある日の朝早く、村田は宿の廊下の梁にひもをぶらさげて、首を吊ろうとした。さいわい、ひもが古びていて、彼の体重のために、ぶつんと切れたから、助かったが、その噂はすぐドヤ街にひろがった。その証拠のように、村田は当分耳の下にひものすれたあとの赤いみみず腫れを残していた。

「いくらなんでも死ななくても、いいのにな。あいつは、大体、神経が弱すぎるよ」
「そうねえ」

とは答えたが、新城千恵子には村田が可哀そうでたまらないらしかった。これまでに輪をか